

病気招くタンパク質 働き解明



信州大学の研究グループが、体の多くの臓器や血管で病気を引き起こす原因となるタンパク質の働きを明らかにし、今後、多くの臓器の治療につながることを期待されています。

この研究は、信州大学大学院の新藤隆行教授らの研究グループが、15日、松本市の信州大学で発表したものです。

それによりますと、新藤教授らは、血管や心臓などの臓器を健康な状態に保つ上で、重要な働きをするあ

る特定のホルモンに注目しました。

そして、マウスに遺伝子操作をしてこのホルモンの機能を調整すると見られていた「RAMP2」と呼ばれるタンパク質の働きを調べました。

その結果、このタンパク質を壊したマウスでは血管や心臓の機能が低下し、腎不全や心不全などの症状がみられるようになることが分かったということです。

新藤教授によりますと、これまでもこのタンパク質の重要性は知られていましたが実際に、遺伝子操作でタンパク質を壊したマウスの実験で、タンパク質と病気の関係を明らかにしたのは初めてだということです。

今後はタンパク質の働きを高める薬を開発することで、有効な治療法がなかったさまざまな臓器に関わる病気の治療につながる可能性があるとしています。

今回の研究成果は、今月19日アメリカの医学専門雑誌に掲載されるということです。

02月15日 19時39分

Copyright NHK(Japan Broadcasting Corporation) All rights reserved. 許可なく転載することを禁じます。